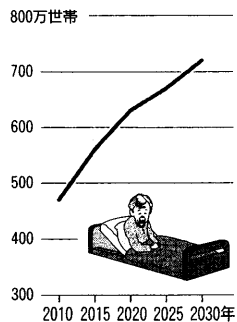


くらしナビ 安心・安全 Safety

anzen@mbx.mainichi.co.jp

さりげなく定期的に

65歳以上の独居高齢者数



(国立社会保障・人口問題研究所推計)

「もともとごら、どうたれ内科診療所」。千葉県松戸市の堂垂伸治院長(61)の診療所に通う独居高齢者の患者の自宅には週一回、録音音声の電話がかかる。

患者は元氣ならブッシュホンの「1」、数日中に連絡がほしい場合は「2」、早めに連絡がほしい場合は「3」を押す。結果は診療所のパソコンに表示され、医師が一目で安否を確認できる仕組みだ。

堂垂院長が独居高齢者のことを考え始めたのは5年前。松戸市・常盤平の高齢者支援連絡会の専門部会長に就任、独居高齢者の通院患者を調べた。その結果、近所に親類もなく、介護保険も利用しておらず、地域とのつながりが薄い人が多いことに気づいた。

そこで、独居高齢者の患者の家に看護師が月一回電話をするようにした。だが患者からは「そ

自動の安否確認電話 ■ 電気ポットやガスの使用状況 メールに

現在の時間患者約75人に電話の見守りを続けていく。「要連絡」の返事がくるのは月平均2〜3回。救急車を手配したり、

支障センターや病院などに電話の見守りを始めていく。「要連絡」の返事がくるのは月平均2〜3回。救急車を手配したり、

効果があった」と話す。来年1月からは数理技術が「おたすねフォン」として製品化し、地域包括

独居高齢者の暮らし どんな方法で見守ればいいのか？

NAVIGATOR

看護師を自宅に派遣したこともあるが、多くは電話口でどんな薬を飲んでいるかなどをアドバイスし、解決している。

自分から診療所に電話するのを遠慮しがちな患者たちにも「さりげない見守りがうれしい」と好評だ。患者の費用負担もない。

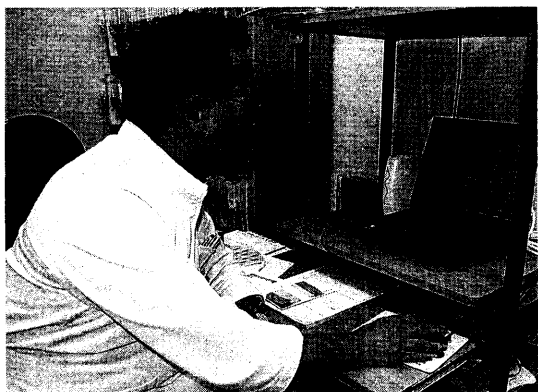
堂垂院長は「孤独死が完全に防げるわけではないが、医療機関に見守られているという安心感を与え、症状の悪化を防ぐ効果があった」と話す。

来年1月からは数理技術が「おたすねフォン」として製品化し、地域包括

地域のサービス充実の自治体も

現在は通院患者約75人に電話の見守りを続けていく。「要連絡」の返事がくるのは月平均2〜3回。救急車を手配したり、

東京ガスは、ガスの使用時間などを定期的にメールで通知する「みまもろ」を02年からスタート。加入費は5250円、利用料は月3150円、約3800人が利用している。



独居高齢者の通院患者からの返事をチェックする堂垂伸治院長

地域福祉に詳しい川村匡由・武威野大大学院教授は「子の都合ばかりでなく、親にとってどんな支援が必要かを考えることも大事。地域住民による見守りサービスなどが充実している自治体もある。情報を広く集め、活用していく」と話す。

【田沼浩子 写真も】



ストップ 高齢者の孤独死

「独居高齢者が孤独死しないように」と、松戸市の幸谷町会(伊藤久美子会長)が来年2月から、地元の新松戸診療所と提携した高齢者安否確認システムを運用を始める。診療所に設置した「安心電話システム」から、町内の約480人の高齢者に電話を自動発信。高齢者がブッシュホンで健康状態を回答する仕組み。県高齢者福祉課は「町会が独自に行

安否確認システムで

松戸・幸谷町会 地元診療所と提携

例は珍しい」として、電話は当初、希望の日と時間に週一回かけられる。高齢者が自身の健康状態について「異常なし」なら「1」を、「ちょっと心配」なら「2」を、「すい連絡」なら「3」を押すと、同診療所のパソコンにそれぞれ青、黄、赤が表示される。

赤になった場合、同診療所がすぐに高齢者の自宅に電話し、具体的な状況を聞く。また応答がなかった場合、診療所から町会に連絡が入り、待機しているボランティア10人が高齢者の家に駆けつけ、国の「地域支え合い体制づくり事業」の補助金を得て実施され、電話代は診療所が負担すると

このシステムは、同市のどうたれ内科診療所の堂垂伸治院長が07

来2月から、電話で毎週健康確認